育てよう落書運動

三川ではパンの味を変える

三川、港務の両支部で落書運動を実施してから、はやくも一カ月になろうとしているが、この運動はその後どう発展しているだろうか今号ではこの問題についてスポットを当ててみることにしました。

悩みから希望へ

三川支部ではいまテストケースとして坑外便所十数カ所に落書帳を備えつけています。教宣部でこれをはじめてからはやくも一と月近くになっています。

予期はしていたものの最初の期間での悩みは、心なきいたずらをするものが次々とでることでした。備えつけの用紙はおろか、鉛筆、それに備えつけ用の板（用紙の下につけて書くのに便利にした）までも失敬するものや、便壺に叩きこんでいくものなどがあらわれたことです。しかし馬鹿気たことを書いたものもいくらも出てきましたが、職場の悩みや苦情、訴えなどが最初から出ているのには大いに注目をし、またこの運動に対する自信もつけられ教宣部ではたゆみなく続けてきています。

心なき同僚のしわざに怒りと悲しみをこめて、落書運動を切望する組合員の落書が出ていたのもこの時期でした。

「しかたがない」を「しかたがある」に

「なるようにしかならん」「しかたがない」という言葉を私たちはよくききます。私達の「しかたがない」はまるで共働の口ぐせになっているようです。健康で文化的な生活を国民のすべてが共に楽しむようになれば「しかたがない」ということはほとんどなくなるかも知れませんが、現在の貧しいくらしではすべてのものが不足だらけで豊かな生活などすぐ来そうもないしそんなものは自分たちの手のとどかない所のものだと頭からきめてかかる気持しかたがないのだと、決めてしまっている。というようなことが原因のようです。「しかたがある」ようにするための努力なしに「しかたがない」とカンタンにあきらめてしまう傾向がなぜ私たちの生活を支配しているのでしょうか「メンファーズ」（しかたがない）という言葉を常に吐いていたといわれる中国では、現在「メンファーズ」というかわりに「困難を克服して」という言葉に変っているそうです。私たちも貧しいくらしの中から一つづつでも「しかたがない」をなくして「しかたがある」にするためその原因を生活と歴史の中から正しくみつめて私たちのくらしを希望に満ちた「しかたがある」ものにしたいと思います　（三川　前田幸子）

擔当部で解決へ

こうして三川支部では落書運動がつづけられ、いましだいに成長してきています。さいきんではこの落書が執行部でどしどし取上げられ解決へと進められており、すでに数件が解決をみているほどで、したいにこの運動が実を結んできています。中には悩みばかりでなくはやくも詩までが飛び出してきており、この運動にたいするみんなの理解も一歩一歩と高まりつつあるようです。

子供が無心に落書するのと同じく大人もときには落書をし、それがどう発展するかをみるのも楽しいものでしょう。

この落書がどう執行部で処理されているか、二、三の例を長浜での三川支部でのぞいてみました。

放電の安全燈

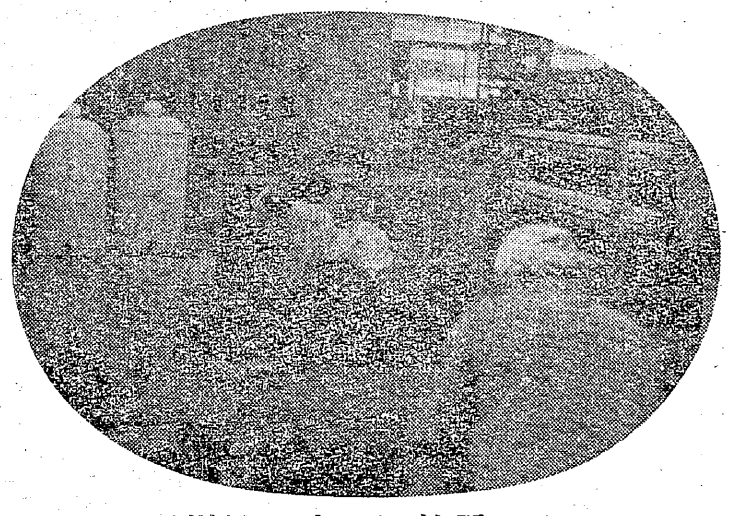
厚生部宛としてこういう意味の落書がありました。「一番方上りに分院に注射をしに行ったが、注射針の消毒に長時間かかり、長い間待たされた。理由は消毒用器の蒸気が足りないからだそうだが、疲れているし待たされるのはつらい」と、厚生部では早速これを取上げ交渉した結果、会社の方で何とか善処するようになりました。

また「最近の残業パンはまずくて喰えない、なんとかしてくれ」という落書がみつかるや、労働部では時を移さず職場のパンをみんな集めて、納入するパン屋とかけあった結果、パン屋もその点を認めて「終戦時の食糧難からか、非常に味の点ではまずいのも作っていましたが、これは質よりも量に重点がおかれていたからです」と言い、こんご味のよいパンにすることが約束されている。

このほか坑内作業にもっとも大切な安全燈の件について「さいきん非常に安全燈の放電したのが多くて困る」という落書があらわれると、この問題もすぐとり上げられて、他人の弱点を見抜くことにたけている。人間と社会の暗黒面に通じ「他人のためになることをするような人間はいない」という信念を持っている。

この彼にも欠点があった。それは金持、上流社会の人たちをだましはするが、決して貧乏人を食いものにしたり、いじめたりはしないという主義と、自尊心が高くてメンツを重んじ、それを守るためには身の危険をも顧みようとはしない、義侠者や密告者になるのは絶対イヤだという性質である。

この結果放電検査場で一々厳重な検査が実施されて、放電している安全燈は区分されて別な場所に一かたまりにおかれるようになった。このように二、三の例を上げたが現在支部では教宣部によって毎日この落書は回収されており、該当担当部にまわされ、各担当部では可能なかぎりこれを取上げ解決へ力を注いでいるありさまである。



三川鉱の安全燈放電検査場

【短篇小説】のれん物語

関口隆司

源さんの屋台には、肉太の字で（源）と染め抜いた、赤い派手なのれんがさがった。福井にいる須飼十吉が、わざわざ送ってくれたものであった。

―よもや、屋台だとは気がつかなかったんだな。欲み屋には違いはねえが…。

苦笑しながら源さんは、女房に手伝わせて早速はりめぐらした。

「乳」までついたのれんは、どうみても古びた屋台には仰仰しく、不似合なものであったが、源さんは新店の飾りつけを終えたあとのような寄びで、煙をくゆらしていた。

町工場がひしめいている辻のいつもの場所に屋台を据えると、源さんは客の来る合間に二、三度遠く離れて、のれんの具合をみた。

源さんたちが、大量に工場を追われたのはそれから間もなくのこと、昭和二十九年の春も終りに近い頃だった。工場には、形ばかりで賃上げの闘争すら一度もしたことのない労働組合があったが、さすがにその時は、赤旗に団結の鉢巻きで二十日ばかりストライキをした。源さんはストライキなどまったく始めてのことだったので、何か悪いことをしているように感じたりした。

須飼十吉と知りあったのは、そのストライキのときだった。三十を幾つか越したと思われるフライス工の須飼十吉は、解雇の不当をなじって弁舌さわやかに工場長や課長を相手にまくしたてたものだった。

―二十五年の勤続、人生のほとんど半ばをこの工場に捧げて働きづめてきた、いわば功労者たるべき人をば、履き古しの草履のごとく放りだすとは一体何事だ。

二十五年勤続者は源さんひとりだけだったから、引きあいにだされるたびに、源さんはぶるつと、身震いがして下腹が重くなったものだ。やがてストライキの甲斐もなく、労働者たちの解雇が決った日、須飼にさそわれて源さんは飲みあかした。そして「これからは一杯屋でもやるさ」という彼に、須飼が

―（源）ののれんを贈らせてもらうよ。

と約束したのであった。

それから三年、源さんは生活に追いまくられる忙しさの中で、いつか約束ごとなどきれいさっぱり忘れていたのだった。

―それにしても、義理がてえ男だなあ。

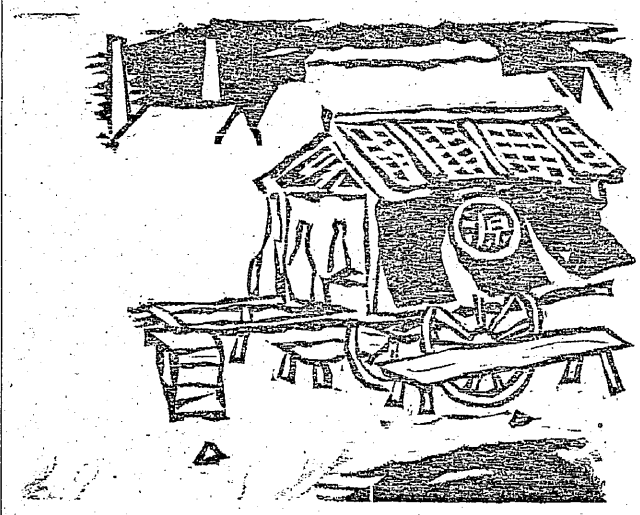
そこで源さんはまた屋台を離れて、何度目かののれんの遠見をした。

―まるで粋な小料理まがいだよ丁度来合わせた口の悪い常連が源さんの背中をぽんと叩いてひやかしをいった。

―これぢや、ますます繁盛りで帰れねえ。

宵うちは飲んだことのない源さんも、その日はめづらしく麻割りで相手をした。そして理髪の煮こんだ大きいのを、特別サービスにふるまった。

（さしえは高頭祥八）



―新協劇団―ネクラソフ

新協劇団公園の「ネクラソフ」が来る十一月二十七日、夜五時から市民会館で行われることになった公演は八場、原作はサルトルの「ネクラソフ」を劇化したもの。

主人公は白系露人を父とし、フランス人を母とし、ロシヤで生れ、生後六カ月でロシヤを去り、詐欺師となり、二十才のときから優柔に追われ通し、三十五才のいままで、百二回の詐欺を働きながら、一べんも捕まったことのない混血児の大詐欺師である。彼は詐欺を芸術だと心得ている。ウソの天才で、ソヴエトの内務大臣ネクラソフに化けるという、一世一代の大詐欺をやって、自分の声明一つでニューヨークの株式相場を上下させ、軍需産業のブームを生み出す存在になったが、それが実は資本家の道具に使われているにすぎず、結局貧乏人をだます功績によって、資本家から賃金を与えられている被使用人にすぎないことに気がつくと、絶望のふちに沈みこみ、神通力を失ってしまうのである。

なおこの来牽する劇団中には、映画「真昼の暗黒」に主演した小林寛氏も同じく出演した相生千恵子氏も一行中に加わっている。

マコ一の件事人殺紅口

口紅殺人事件

アパートに住む若い独身女が殺され、死体の傍らに「おふくろに聞いてくれ」という無気味な口紅文字の落書が残されていた。

この殺人事件の手掛りは全く得られず、侵入経路、犯行の動機は全く不明だった。

敏腕記者モブレイは恋人の通信部長秘書ナンシイを酔って訪れたが偶然その扉から犯人侵入経路のあるヒントをつかんだ。警察、新聞社を愚弄するようにまたも殺人事件が起るが、現場にとんだモブレイは、たくましい推理力を発揮して激闘のうえ捕えることになり新聞の大特ダネとなったが、社内の功名争いをニガニガしく思う彼は辞表を提出して社を去る決心をするのだった。（銀星）

賞金五百圓

【第十回】ヤマ・グラム

（締切十一月二十五日）

【ヒント】今回はヒントはぶきます。

【問題】

ソ連の官僚化の傾向に対し中国は共産党が◇◇の前衛になって働いている◇も◇◇を感じぬほど素ばくな◇◇で◇◇状態は低いが生々とした感じで独立をよろこび◇◇に心から協力している政治的には◇◇も認める中のあるやり方であり全く大人の感であせらず驕がずやっている対日感情もよく対日貿易ではまず◇◇◇を一億二千万台ほどほしいが日本で出来るだろうかと云っている

▲使用文字　当用漢字に限ります（補正文字を含む）音訓も当用漢字音訓表によります。当用漢字ではかなりの字体が簡略になっていますが、新旧どちらの字を使っても正解です。

▲解答は順番に漢字を書くだけで結構です。

▲賞金　五百円　正解者多数の場合は抽せんにより五名に分配します。

▲正解者なき場合は、賞金は次回に加算いたします。

▲応募規定　用紙はハガキの大きさ。解答用紙には機外解答下の三鉱労組のマークを切抜いてはつって下さい。組合員に限るなお氏名はもちろん、支部名、職名も必ず記入のこと。

▲賞金は本人印鑑持参のうえ本部でお受取り下さい。残念賞は支部教宣部でお受取り願います。

▲【宛先】大牟田市不知火町二丁目七六　三池炭鉱労働組合編集部ヤマ・グラム係。

本部編集部か支部教宣部へ直接届けられても結構です。

今週の映画

○セントラル＝廿一日より「白鳥」「情熱の悪魔」

○太陽館＝廿一日より「おかしな奴」「天上大風」

○大天地＝廿一日より「ことは静かなり」「金語楼の運転手物語」

○東映＝廿一日より「振袖大平記」「獅子丸一平（完）」

○グランド＝廿一日より「午後八時十三分」「リンゴ村から」

○銀星＝廿一日より「戦塵」「白昼の脱走」

○名画座＝廿一日より「四十人の女盗賊」「愛情は降る星のかなたに」

子どもらん

オリンピックのはなし

いまから約二千七百年ばかり前、ギリシヤで若ものたちをあつめた競技大会がひらかれました。この大会の期間は激しい戦争もピタリとやめられ平和がおとづれるのです。大会は、四年ごとに行われ約六百年にわたって百四十五回までつづきました。これが古代オリンピックです。

一八九六年（明治二十九年）、フランスのクーベルタン男爵のよびかけで、オリンピックを復活した第一回大会が、ゆかりの地ギリシヤのアテネでひらかれました。それから大会は昔にならって四年ごとにひらかれ、ことし十一月二十二日からオーストラリアのメルボルンで第十六回オリンピックがひらかれるのです。その間、一九一六年（大正五年）の第六回（ベルリン）は第一次世界大戦のため、一九四〇年（昭和一五年）の第十二回（東京）と四四年の第十三回が第二次大戦のため中止されています。

日本がオリンピックに参加したのは、一九一二年（明治四五年）の第五回大会からですが、第十四回（一九四八年、ロンドン）には参加していないので、ことしの大会で八回目になるわけです。

日本選手の活躍はめざましく、第九回大会（アムステルダム）での織田幹雄選手の三段跳、鶴田義行選手の二百メートル平泳、第十一回大会（ベルリン）での前畑秀子選手の二百米平泳の優勝などは〝スポーツ日本〟の名を高めました。こんどの大会では三段跳の小掛照二選手をはじめ、水泳、体操、レスリングなどの大活躍が期待されています。

（十）年の（歴史）は（短）いようで（長）いことにわれわれにとっては（苦難）の闘いの道であったのだからこの苦難の中からわれわれは（一つ）づつ大きなのびと（一）しょにそれからやおら（立）ち（上）った（一九五二年の炭労（十月以降）六三日ストではこのし子が力を（発揮）